

# 概念主体の事態解釈と構文

## — have 構文の認知構造 —

濱 田 英 人

### 0. はじめに

言語表現が人間の認識作用を反映していることは周知のことである。記述対象である事態をどのように表現するのか、つまり、事態の参与者の中の誰(何)を主語にするのか、また、構文、時制、相、態の選択等はすぐれて概念主体がその事態をどのように解釈 (construal) するか起因すると言える。そしてこのことは当然次の対立にも当てはまる。

- (1) a. There are some maps on the table.  
b. The table has some maps on it. (中右 1998 : 55)

(1a-b)は記述対象である事態は同一であるが、それを概念主体がどのように捉えているかという認知プロセスの違いを反映している。

濱田・景山 (2008) では存在 there 構文を認知的視点から考察し、この構文がどのような認知プロセスを反映しているのかを明らかにした。つまり、存在 there 構文は there によって提示される心的空間を参照点としてそこにターゲットである事態を位置付ける認知構造であることを主張し、このように特徴付けることで従来から問題となっていた「文法的主語と意味上の主語の乖離」や「定性制約」、また、この構文に現れる動詞が「存在」や「出現」を表す非対格動詞ばかりでなく非能格動詞や他動詞も現われるという事実を自然に説明できることを述べた。

このことを踏まえ、本稿では(1b)の have 構文に着目し、この構文がどのような認知プロセスを反映している構文であるのかを明らかにする。具体的にはこれまで認知言語学の視点から、「所有」を表す have は参照点構造を反映した構文 (Langacker 1991, 1999, 2006) であり、「存在」の have への意味拡張は主体化 (subjectification) によるものと説明されており、確かにこの分析は完了や使役を表す場合を含めた have 全体の特徴付けとしては非常に有効である。しかし、参照点構造そのものは幅広く様々な言語現象の根底に存在するものであり、have に固有のものではないためにそれだけでは have の姿を捉え難い。そこで本稿では have をそれが表す「所有」という概念に必要な認知ドメインの視点から分析することで「所有」と「存在」という2つの概念を連続体として捉えることが可能であり、「存在・所有」を表す have 構文のもつ性質をより自然に説明することができることを主張する。

Have に関してはこれまで多くの研究があり、それぞれ示唆に富む分析がなされているが、ここでは中右 (1998) と Langacker (1991, 1999, 2006) の分析を概観し、議論の出発点としたい。

## 1. 先行研究

### 1.1. 中右 (1998) の分析

中右 (1998) は have の意味を「所有」と「存在」に区別し、それぞれの構造を次のように特徴付けている。

(A) 「所有」の have は NP-have-NP の構造をもつ

- (1) a. Ann has a car.
- b. John has only one parent.

(B) 「存在」の have は NP-have-NP-PP の構造をもつ

- (2) a. Mary has smoke in her eyes.

- b. Jim's coat has dirt all over it. (中右 1998 : 82-83)

そしてこの構造上の区別の根拠として次の(3a-b)において(3a)では *in the Pacific* を省略することが可能であるのに対して、(3b)の *in the east* は省略できないことを挙げ、これは(4a-b)の possess での言い換え可能性からも分かるように(3a)の have は「所有」を表し、(3b)の have は「存在」を表しているためであると述べている。具体的には *France* と *the Pacific* の間には内在的関係がないのに対して、*France* と *east* は全体と部分の関係であり、フランスの東部ということで *mountains* の位置を特定しているために、*in the east* を省略すると意味が異なってしまうということである。

- (3) a. France has colonies (in the Pacific). (所有の have)  
 b. France has mountains\*(in the east). (存在の have)  
 (4) a. France possesses colonies in the Pacific.  
 b. \*France possesses mountains in the east. (ibid: 86-87)

また、中右はこのように have 所有文と have 存在文を区別したうえで、there 存在文と have 存在文との共通性を次のように述べている。

- (5) a. There was some dirt on John's jacket.  
 b. John has some dirt on his jacket. (ibid: 93-94)

つまり、(5a)の there 存在文は *some dirt* と *John's jacket* という2つの実体の関係であるのに対して、(5b)の have 存在文では *John, some dirt, his jacket* という3の実体の関係であり、この点では両者は異なっているが、have 存在文の小節補文 [<sub>s</sub>NP-PP] は空間的関係の記述でありまさにこの部分が there 存在文に相当するということである。また、このことに加えて中右は主語 NP と小節補文 S との間には <主語の実体 NP がある状況 S とかかわり (associa-

tion / involvement) をもつ〉という関係があることを指摘しており、この〈かかわり〉を広義の意味で〈経験〉と呼び、have 存在文は〈経験者がある状況を経験する〉という経験事象の記述であると主張している。そして、このことから have 存在文は have 所有文の一環としてよりむしろ、have 経験文の一環として捉える方が自然であるとし、経験事象の概念構造を「経験者が、自分の意思とは無関係に、ある状況とかかわりを持ち、その結果、何らかの影響（物理的あるいは心理的影響）を被る (ibid: 97)」構造として特徴付けている。

そして更にこの〈かかわり (経験)〉を〈接点〉と抽象化し、その語用論的条件付けを以下のように規定している。

(6) 〈接点 (つながり)〉のための語用論的条件

ある実体が ①補文事象への直接参加者であるか、あるいは ②直接参加者に準ずる実体であるとき、①または②の実体と補文事象との間には接点 (つながり) があるという。そしてそのとき、①または②の実体は〈経験者〉としての資格を有するという。つまり、そこに〈かかわりをもつ (経験する)〉という関係が成立する。

ただし、②の「直接参加者に準ずる実体」とは直接参加者と〈所有関係〉(譲度可能・不可能)あるいは〈対人関係〉(血縁・夫婦・友人関係など)のような内在的関係を結ぶ実体である。その一方、空間的な〈位置関係〉は典型的な物差しとはなりにくい。これは偶然的な関係であって、どのような内在的な関係でもないからである。

(ibid: 101)

そこで、この〈接点 (つながり)〉のための語用論的条件がどのように適用されるのかを簡単に見ておく。

(7) a. John had [a spider crawling around on his head].

b. John had [grass on his trousers]. (ibid: 102-103)

(7a)は have 経験文であるが、ジョンが経験者として解釈されるためには *on his head* という位置表現を省略することはできない。これを省略してしまうと補文事象と経験者との間の接点がなくなってしまうからである。この(7a)では補文事象の直接参加者は〈クモ〉と〈ジョンの頭〉である。そして〈ジョンの頭〉と〈ジョン〉は不可分な部分・全体の関係であり、所有関係にある。このためにジョンと補文事象との間には接点があることになり、ジョンは経験者となる資格を十分有するといえる。そしてこのことは(7b)の have 存在文にもあてはまる。(7b)では補文事象の直接参加者は〈ジョンのズボン〉と〈草〉である。また、ジョンとズボンの間には所有関係が成り立っているため、ジョンと補文事象の間にも接点があるといえるため、ジョンは経験者としての資格をもつと言えるのである。

このように中右は have 存在文を have 経験文と並行的に論じている。しかし、ここには少なくとも2つの問題点があるように思われる。その1つは次のような表現である。

(8) a. The table has [a pencil on it]. (ibid: 104)

上の(8)では文主語は *the table* であり、中右は「テーブルの上に鉛筆がある」という補文状況において〈テーブル〉はその状況への直接参加者にほかならないので、経験者として立つことにも問題はないと述べているが、これを経験者と考えることは難しいように思われる。

また、次のデータの分析にも問題が残る。

(9) A : Where is the book?  
B : John has it. (ibid: 88)

上の(9B)の場合に have が *own* や *possess* で言い換えることができない理由として中右は「これは *own* や *possess* が何らかの所有関係を表し、所有関係は

目に見えない抽象的な認識領域に属するものなので、Aの質問に含まれる物理的な空間関係を表すのに適さないからである。(ibid: 88)」と述べている。そうするとこの(9B)は have 存在文ということになるが、これは中右の主張する have 存在文の構造と一致していない。

以上のことから、have 存在文と have 所有文を中右の主張する(A)と(B)という構造の違いによって区別することは難しいように思われる。そこで次にこのことを踏まえて、Langacker (1991, 1999, 2006) の分析を概観してみる。

### 1.2. Langacker (1991, 1999, 2006) の分析

Langacker (1991, 1999, 2006) の一貫した主張は have は事態の中で trajector として認識される実体が主語として言語化され、それが参照点として機能し、landmark である目的語がターゲットとなっている参照点構造をもつ構文であるということである。

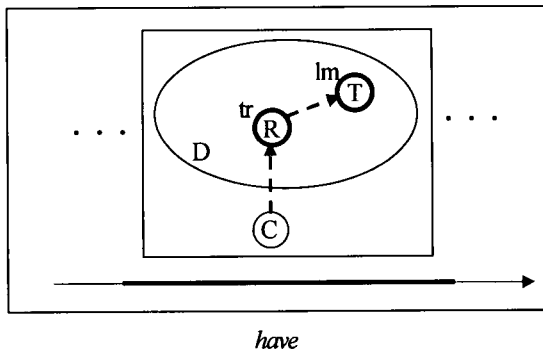


Figure 1

(Langacker 1999: 183)

そしてこのように特徴付けたうえで、(10)に見られる動作主性の弱化を主体化現象として説明している。この主体化とは(11)のように定義付けられる概念であり、言語化の対象となる事態や場面の中に概念主体が自ら関わりをもつようになる現象をいう。

- (10) a. Watch out — he has a gun!  
b. I have an electric drill, though I never use it.  
c. They have a good income from judicious investments.  
d. She often has migraine headaches.  
e. He has a lot of freckles.  
f. We have a lot of skunks around here.

(Langacker 1999: 183, 185)

(11) Subjectification:

... this subjective component is there all along, being immanent in the objective conception, and simply remain behind when the latter fades away. (Langacker 1999: 298)

上の(10a-f)のそれぞれにおいてその根底に参照点構造が存在していることは同じである。違いは controllability の度合いの違いであり、(10a)では have の主語は目的語をコントロールしているという点で直接的な力の行使を行っているのに対して、(10b)では目的語の指示対象を直接手に持っていないという意味で、その力の行使が(10a)よりも弱化しており、(10c)では力の行使はあるものの主語は動作主であると同時に経験者にもなっている。また、(10d)ではその弱化が更に進み、文主語はもっぱら経験者として機能しており、更に(10e)や(10f)では主語は目的語に対して何のコントロールも行使しておらず、ただ単に参照点として目的語を位置付ける機能のみを果たしている。

この意味の推移は次のように図示することができる。図2(a)では文主語の目的語に対する controllability も高く、参照点からターゲットへのアクセスの経路の源は have の主語に帰されるが、図2(b)では controllability が弱まり、文主語は経験者としての意味合いが強まり、更に図2(c)では文主語から目的語へのアクセスは概念主体の心的経路 (mental path) によって担われているのである。

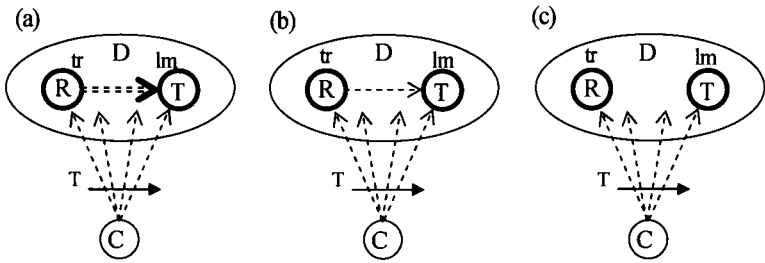


Figure 2

また、Langacker (1991) は have 構文では文主語と目的語の間に「潜在的な関連性 (potential relevance)」があると主張し、このことを図3のように両方向の矢印(r)で示している。このことは have 構文の性質を考える上で重要であるが、このことについては後に述べることにしたい。

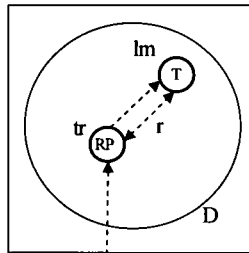


Figure 3

(Langacker 1991: 222)

このように Langacker は have 構文を参照点構造を反映している構文として分析しており、このことは次の (12a) と (12b) の意味的並行性をうまく捉えることができるという利点を有している。

- (12) a. John's car
- b. John has a car.



また、主体化は(13a-c)に示される have の意味の歴史的な変化（意味拡張）を自然に説明することができる。

(13) have の意味拡張

a. 〈手に持つ、所有する (GRASP)〉

To hold in hand, in keeping, or possession; to hold or possess as property, or as something at one's disposal.

[Beowulf (Z.), c888]

(手に持つ、手元におく、所有する、財産として、あるいは意のままにできるようにもつ)

b. 〈関係を所有する (POSSESS THE RELATION)〉

To hold or possess, in a weakened sense; the relation being other than that of property or tenancy (.) The relation is often reciprocal: the father has a son, the son has a father; the king has subjects, his subjects have a king; (...) a man has a house, the house has an owner or tenant.

[c1000]

(弱体化された意味で)所有する。交換可能な関係を意味することが多い。たとえば親子関係など)

c. 〈影響を受ける、所有される (TO BE POSSESSED OR AFFECTED WITH)〉

To be possessed or affected with (something physical or mental); to be subjected to; to experience; to enjoy or suffer.

(e. g. He had very bad health.)

[c1000]

(経験する、影響を受ける)

(早瀬 2002 : 218)

しかし、ここで改めて参照点能力とは何かを考えてみると、それは人間が世界を把握する一般的能力の一つであり、所有属格や have に限られるわけではなく、様々な言語現象に関わっている認知プロセスである。実際にこのことは

以下の例からもうなずける。

- (14) a. They envy you your wealth.  
 b. John caught her by the hand.  
 c. In front of the house stood a beautiful woman.  
 d. Have you read Shakespeare?

上の(14a-b)は全体と部分の関係であり全体の方が目立って認識されやすいことから、*you, her* がそれぞれ参照点として機能し、*your wealth, the hand* がターゲットとなっている。また、(14c)では *the house* が定名詞句でありすでに話題となっており、意識の前面にあることから、それを含む *in front of the house* という空間が参照点となり、*a beautiful woman* がターゲットである。更に(14d)はメトニミー表現でありターゲットは言語化されていないが、この場合 *Shakespeare* が参照点として機能し彼によって書かれた作品がターゲットとして理解される。また、更に Langacker (1999) では話題 (topic) はそれに続く命題に対して参照点として機能していると述べている。

- (15) This computer, I really like it. (Langacker 1999: 367)

従って、参照点構造を反映しているとしただけでは *have* の姿を捉えたとは言いがたく、より精密に特徴付けるためには他の視点も必要であると考え。そこで、次節では *have* の原義である「所有」という概念がどのようなものであるかを考え、問題解決の糸口としたい。

## 2. 概念主体の認知プロセスと *have* 構文

前節では中右 (1998) の分析を概観し、*have* 所有文と *have* 存在文を構造的に区別することには疑問の余地があることを指摘した。そこでこの節では *have*

が原義として有する「所有」とは何かを認知ドメインの視点から考えてみたい。

### 2.1. 認知ドメイン (Cognitive domains)

人間が「モノ」や「事態」を概念化するときには「形」や「材質」など「何らかの視点」からそれを捉えて表現する。認知言語学ではこれを「形の認知領域」「材質の認知領域」といい、その領域の中でモノや事態が解釈されると考える。つまり、「モノ」や「事態」の概念化には様々な認知ドメインが関与しており、それが表現の意味に深く関わっているということである。例を挙げると、次の(16a-c)と(17a-b)のそれぞれでは同一の実体が（ ）で示される認知ドメインが前景化されることで意味解釈が異なっている。

- (16) a. The photograph is torn. (材質)  
b. The photograph is out of focus. (技術)  
c. The photograph was awarded a prize. (美的価値)

- (17) a. Televisions need expert repairmen. (機能)  
b. Televisions look nice in family rooms. (形あるいは大きさ)

(John Taylor 2002: 442-443)

このように認知ドメインは「モノ」や「事態」を概念化するために必要な背景知識であり、語の意味には複数のドメインが関与し、それらがドメイン・マトリックスをなしているのである。そしてここで重要なことは、それを構成するドメインの際立ちがすべての場合に一樣なのではなく、同じ語でも、それが使われる文脈によってあるドメインが前景化し、それに応じて相対的に他のドメインが背景化するというように、中心的なものとうそでないものがあるということである。

2.2. 「所有」の概念化と認知ドメイン

have が「所有」と「存在」の意味を表していることから、ここで改めてそれぞれの概念について考えてみると、この二つの概念は何らかの関連をもっていると考えられる。事実、そうであるからこそ、先に Langacker の分析で見たようにこの二つの概念を主体化という現象で捉えることができるわけである。そこで、ここでは have が原義として有する「所有」という概念に関わる背景知識としてどのような認知ドメインが関与しているのかを考えてみると、少なくとも次の五つを仮定することができる。

(18) 「所有」の構成概念と認知ドメイン

- | 〈構成概念〉                            | 〈関与している認知ドメイン〉                         |
|-----------------------------------|--|
| 1. あるモノを所有するための行為                 | ……………action (D <sub>1</sub> )          |
| 2. 獲得したモノを所有者の領域に保持する力            | ……………controllability (D <sub>2</sub> ) |
| 3. 獲得されたモノが所有者の領域にあるという空間的位置 (所在) | ……………location (D <sub>3</sub> )        |
| 4. 所有者と所有物の間に成り立つある種の関係           | ……………relation (D <sub>4</sub> )        |
| 5. 結果状態としてのモノの存在                  | ……………existence (D <sub>5</sub> )       |

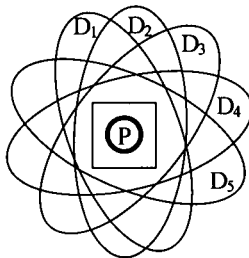


Figure 4

このように「所有」という概念をそれを構成している認知ドメインの視点から分析することの利点は have のもつ多義性をより自然に説明できるということである。つまり、「所有」の概念には「存在」という概念がそれを構成するものとして含まれており、have の意味解釈をドメイン・マトリックスの中のどのドメインが前景化しているかという問題に帰することで、この二つの概念を連続体として捉えることができるということである。つまり、have の意味をその複合ドメインのどの視点から事態を解釈する (construe) か (どの認知ドメインが前景化されるか) で have が典型的な「所有」を表したり、「関係」を表したり、あるいは「存在」を表すのである。

### 2.3. have の概念化と認知ドメイン

「所有」の構成概念と認知ドメインを (18) のように仮定すると英語の have は未完了プロセス (imperfective) であることから認知ドメイン  $D_2$  から  $D_5$  が主に関わることになる。そこでこの視点から have によって表されている文主語 (tr) と目的語 (lm) の関係を考えると以下のことが言える。

(tr/lm の関係)

- (19) a. Be careful — the robber has a gun in his hand. (immediate control の関係)
- b. John has a new computer. (potential control の関係)
- c. Children and men, especially, have a right to express those feelings. (potential control の関係)
- d. Sally has three grandchildren. (kinship (relation))
- e. Marvin has frequent headaches. (potential relation)
- f. Sheridan has brown eyes. (intrinsic relation)
- g. We have some vast open areas in the United States. (location の関係)
- h. This house has four bedrooms. (location の関係)

- i. The Grand Canyon has an interesting geological history.  
(location の関係)
- j. John has a lot of things to do. (existence)
- k. But it really would be nice to have a young person about the house. (existence)

つまり、(19a)では文主語の *the robber* が目的語の *a gun* を実際に手にもっているということでそれを直接コントロール (immediate control) していると言える。また、この場合、文主語の意志の度合い (volitionality) も非常に高い。(19b)では文主語の *John* はコンピューターを所有しているが、今手に持っているということではなく、おそらく家かどこかにあるということで、使おうと思えばいつでも使えるという点で潜在的にコントロール (potential control) していると言える。(19c)も同様に、権利を所有しているが、その権利を行使しようと思えばいつでもできるという点で潜在的なコントロールである。このように controllability の度合いの違いはあるが、(19a-c)で共通していることは文主語と目的語の関係がコントロールする側とされる側の関係であり、文主語の何らかの力の行使によって成り立っている volitional な関係であるということである。つまり、「コントロールドメイン」が前景化されており、その視点から事態が解釈されているのである。これに対して(19d-f)は文主語は人間であるが、ここでは意志が関与しないことからコントロールドメインは背景化され、相対的に「関係ドメイン」が前景化されることで文主語と目的語の間に成り立つ一定の関係概念 (relation) の視点から事態が解釈されている。具体的には(19d)は文主語と目的語の間に成り立つ親族関係 (kinship) を表しており、(19e)は文主語と頭痛の関係であるが、これは常にある関係ではないという意味で潜在的関係 (potential relation) ということができる。また、(19f)は文主語と目の色の関係であり、譲度不可能という意味で intrinsic relation である。これに対して(19g-i)は文主語と目的語の relation を表していると思なすこともできるが、この場合の文主語が目的語の所在を表しているため、ここでは「所在ドメイン」

が前景化されその視点から事態が解釈されているとするのが妥当であると考えられる。具体的には(19g)の文主語 *we* は Langacker (1991: 213) も指摘しているように ‘people in general’ ということであり、特定の人を指しておらず、この *we* はむしろ一種のメトニミー表現であり、図5に示されるように *we* から連想される空間を指示していると言える。また、(19h)の *This house* や(19i)の *The Grand Canyon* も同様に空間として解釈できる。

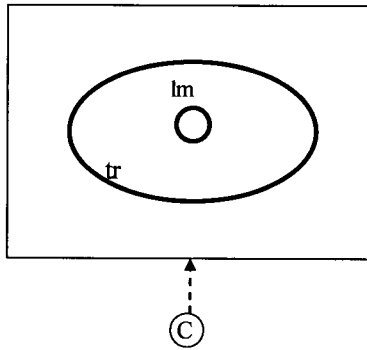
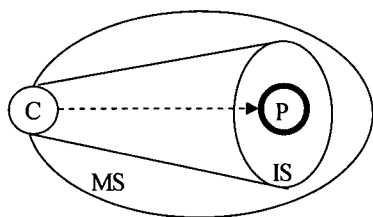


Figure 5

更に、(19j-k)では(19j)の文主語 *John* は人間であり、この点で意志を有し、目的語の *a lot of things to do* に対して controllability も関与し得るが、この文の意味の重点は目的語の指示対象の存在 (existence) である。このことは(19k)では更に明確であり、*a young person* という人の存在そのものが問題になっている。つまり、(19j-k)ではその概念化に関与しているドメイン・マトリックスの中の「存在ドメイン」が前景化しているということが出来る。

では次に、Langacker が *have* の特徴として述べている potential relevance (潜在的関連性) について考えてみたい。結論的にはこのことは Langacker の主張するスコープという概念によってより良く理解することができる。Langacker (1987) は言語表現が直接指示しているプロファイルを特徴付けるために必要なコンテキストをスコープと呼び、図6に示されるように概念化の内

容全体を含んでいるスコープを最大スコープ(maximal scope)、その中で特にプロフィールを特徴付けるのに関与しており、際立っているスコープを直接スコープ(immediate scope)と呼んで区別している。



C : conceptualizer  
 P : profile  
 IS : immediate scope  
 MS : maximal scope

Figure 6

(Langacker 1999: 205)

そこで、この視点から次のデータを観察してみよう。

- (20) a. A body has two arms.  
 b. An arm has an elbow and a hand.  
 c. A hand has five fingers.  
 d. A finger has three knuckles and a fingernail.
- (21) a. ?A body has two elbows.  
 b. ?An arm has five fingers.  
 c. ??An arm has five fingernails and fourteen knuckles.  
 d. ???A body has twenty-eight knuckles. (Langacker 1987: 119)

ここで(20a-d)が容認可能であるのは文主語が目的語の指示対象の直接スコープとして機能する身体の部分を表しているからであり、それに対して(21a)から(21d)にいくに従って容認度が低下するのは主語と目的語の概念間の距離が大きくなっているからであり、目的語の指示物の直接スコープとして機能し難くなるからである。そして、このことは have 構文の性質を考える上では非常に



重要であり、これまでの議論を踏まえると have の認知構造を(22)のように特徴付け、図7のように示すことができる。

(22) 〈have の認知構造〉

have 構文は概念主体が current discourse space 内の特定の实体を tr として、その dominion 内にあるもう 1 つの实体 (lm) で tr を特徴付ける構文である<sup>1</sup>。lm が tr の dominion 内に存在するという事は lm からすると tr はその直接スコープとして機能しているということであり、この帰結として両者の間には potential relevance が存在する。have の意味解釈はその概念化に関与するドメイン・マトリックスの中のどの認知ドメインが前景化されるかに帰因する。

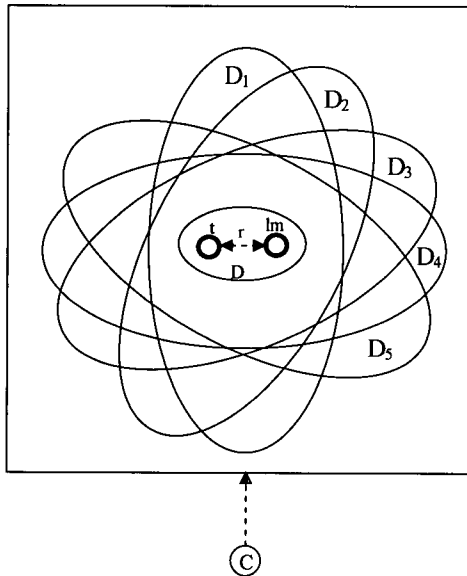


Figure 7

<sup>1</sup> この点で Have 構文は中間構文 (middle constructions) と似た性質をもつと言える。つま

(22)のように have の認知構造を特徴付ける利点は、前述のように have の意味解釈を認知ドメイン・マトリックスの中のどのドメインが前景化されているかという問題に帰することで「所有」の have と「存在」の have を連続体として捉えることが可能となることである。先に(19a-k)で見た前景化されたドメインと事態が表す意味の関係はいわば典型的な場合であり、記述されている事態そのものは同一であってもそれをどの視点から捉えるか、つまり、どの認知ドメインが前景化されているかが意味に貢献している。このことは次のデータを観察することでもうなずける。

- (23) a. Be careful — John has a gun in his hand. (immediate control)  
 b. John has a gun in the drawer for use in self-defense.  
 (potential control)  
 c. A : Where is my gun?  
 B : John has it. (location)  
 d. John still has my gun in his car. (location or existence)

つまり、(23a)では *John* が実際に銃を手にもってるということから、直接コントロールの関係にある。しかし、(23b)ではジョンが銃を所有している事実は同一であるが、実際に今手に持ってるのではない。従ってそれだけ controllability は低く、間接的コントロールの関係であると言える。更に(23c)ではAの発話に続けてBを言った状況ではジョンと銃の関係は銃の所在ということであり、位置関係を表しているといえる。最後の(23d)では *my gun* という表現からジョンは銃の所有者ではなく、その銃の所在あるいは存在を述べていると解釈されるのである。このように同一の事態がそのコンテキストに応じて前景化される

---

り、両構文は文主語を何らかの手段で特徴つけるものであり、それぞれの違いは中間構文では文主語がその指示対象の内在的属性によって特徴付けられるのに対して、Have 構文は主語を（内在的属性を含め）その指示対象と関連のある実体で特徴付けるということである。

ドメインが変化し、それが表現の意味を決定付けるのである。

また、次の(24a-b)の違いは場所の副詞句である *around here* の有無であるが、それが表す意味は全く異なっている。この違いは文主語の *we* がどのように解釈されるかということであり、(24a)では *we* は特定の人を指しているが、(24b)の *we* は特定の人を指してはおらず、*we* からメトニミー的な意味拡張により「*we* を取り巻く環境や地域」という空間を表していると解釈される。従ってこのことから、(24a)ではドメイン・マトリックスの中の *controllability* のドメインが前景化されやく、「所有」として理解される。それに対して、(24b)では *location* や *existence* のドメインが前景化されやすく、*a lot of skunks* を位置付けるという解釈となるのである。

- (24) a. We have a lot of skunks.  
 b. We have a lot of skunks around here.

更に、次の(25a)、(25b)は中右(1998)が構造的な違いに着目し、(25a)では前置詞句の省略が可能であり、NP have NP という構造を持つことから「所有」を表し、(25b)では前置詞句が省略できず NP have NP PP という構造を持つことから「存在」を表すと分析したものである。しかし、この構造の違いによる区別が必ずしもデータを正しく分析できないことはすでに述べた。そこで、この問題を「所有」という概念に関与するドメイン・マトリックスの視点から考えてみると、(25a)の *France* は権力の主体としての国家を意味しており、ドメイン・マトリックスの中の *controllability* が前景化しやすく、そのために「所有」として理解されると考えられる。また、それに対して(25b)の *France* は国土を表しており、*controllability* のドメインは前景化されず、相対的に *location* や *existence* のドメインが前景化されるため *mountains* を位置付ける空間として理解されるのである。

- (25) a. France has colonies in the Pacific.

- b. France has mountains in the east. (中右 1998 : 86)

以上のことから、have 構文をそれが関与する認知ドメインの視点から分析し、それがどのような意味として解釈されるかはドメイン・マトリックスの中のどのドメインが前景化するかという問題に帰することは十分妥当性を有するものと考えられる。

### 3. 事態の概念化空間と there 構文/have 構文

最後にこの節では have 構文と存在 there 構文の言い換え可能性について考えてみたい。基本的には存在 there 構文と have 構文が言い換え可能となるのは当然 have のドメイン・マトリックスの location か existence のドメインが前景化されている場合であるということになる。言い換えると、have の概念化に関与するドメイン・マトリックスの中のコントロール・ドメインが潜在化している場合である。

- (26) a. There is a book on the table.  
b. The table has a book on it.

しかし、ここで重要なことは言い換えが可能であるということがこの二つの表現が意味的に等価であるということではないということである。それは存在 there 構文と have 構文では概念主体の認知プロセスが全く異なっているからである。

濱田・景山 (2008) では認知文法の視点から存在 there 構文を考察し、この構文が there によって提示される心的空間を参照点としてそこにターゲットである事態を位置付ける認知構造であることを明らかにした<sup>2</sup>。従って there 構文が

<sup>2</sup> There 構文のターゲットはモノではなく事態であり、その参与者 (participant) が be-動詞

表す事態は structural plane 上に概念化されているために任意の具現形 (arbitrary instance) として理解され、その事態が there に概念的に従属 (conceptually subordinate) しているために、summary scanning で捉えられ、「一つの構造体 (a unitary entity)」として「一まとまり (holistic)」に解釈されていることを主張した。このことは there 構文が一般に聞き手にある事態を提示する機能を果たすものであり、聞き手がその事態をどのように理解するのかを考えてみると納得のいく結論であると考えられる。つまり、話し手の発話内容の理解は聞き手がその事態を認識世界で概念化するという過程を経ることで初めて可能となるであり、その概念そのものは Langacker (1999) が(27)のように述べ、図8に示される structural plane 上の概念であると言えるからである。

- (27) ... we found reason to distinguish between the structural plane, representing generalization about the “structure of the world”, and the actual plane, the phenomenal level where actual events occur. ... The structural and actual planes should rather be thought of as two facets of the instance plane, or two levels within it. Events in the actual plane are anchored to particular points in time (t), which can in principle be located with respect to G. By contrast, event instances in the structural plane have no specific temporal location. There are arbitrary instances, conjured up just for purposes of expressing a generalization, namely that occurrences of event type in question constitute one aspect of the world structure and can thus be expected under

---

の後ろの名詞であるため、数もそれと一致する。しかし、英語は中村(2004)のいうDモードで事態を捉える傾向が強いため tr/lm での捉え直しがおこり、そのための虚辞の there が言語化され、これが文法的主語となる。その結果意味上の主語と文法的主語の乖離が生じるわけであるが、このように考えると there 構文は二重主語構文として分析するのが妥当であると考えられる。このことに関して貴重なコメントを頂いた北海道教育大学旭川校の井筒勝信氏に感謝の意を表したい。

appropriate circumstances... The generalization they embody concerning the world's nature does however afford some basis for extrapolating the future evolution of reality in the actual plane. (Langacker 1999: 274-275)

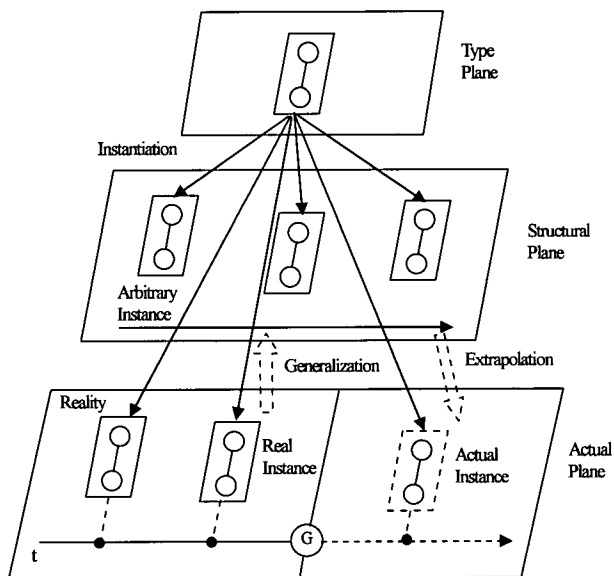


Figure 8

(Langacker 1999: 275)

そしてこのことは(28a-c)のデータを観察することでもうなずける。

- (28) a. Most Americans graduate from high school.  
 b. A messenger always delivers a package on time.  
 c. Zelda wants to buy a fur coat. (Langacker 1999: 251, 276)

(28a)では「アメリカ人は高校を卒業する」という事態に対して、それはほとんどのアメリカ人に当てはまるということを述べているのであり、(28b)では特

定の郵便配達人を意味しておらず、一般的に郵便配達人は時間に正確だと言っているのであり、また、(28c)では *a fur coat* は *Zelda* の願望の中にある実体であり、現実世界で特定されているものではない。このことはまさに *there* 構文における聞き手の認識と並行的である。

それに対して *have* 構文はこの認知プロセスとは異なっており、すでにグラウンドされた特定の実体を主語としてそれを特徴付ける構文である。このことは次のデータからも支持が得られる。

(29) Att'y <=Attorney>: then I advise you to get a taco burger, try that one.

Duke: . . . the taco has meat in it. I'll try that one (FICT)

(30) a. The door has a fairly big opening in it at eye-level through which some daylight filters, and the wall on either side of it is furnished with hooks.

b. ?There is a fairly big opening in the door at eye-level through which some daylight filters, and the wall on either side of it is furnished with hooks. (Douglas Biber et. at. 1999: 956)

(29)で *have* 構文が使われているのはその前の発話に *a taco burger* があることから、*the taco* を主語にしてそれがどのような特徴をもっているかを述べるのが自然であるからであり、また、(30a)に対して(30b)の容認度が低いのは、記述対象である事態がすでにグラウンドされた実体である *the door* についてそれを特徴付けるものとして理解されやすいからである。まさにこのことは先に(22)で述べた *have* 構文の特徴付けを裏付けるものであり、文主語の指示対象は *current discourse space* 内の実体であることを示すものである。従ってこのことから *have* 構文によって記述される事態は *actual plane* 上に概念化されていると言える。

「存在」という概念の言語化には存在 *there* 構文と *have* 構文という表現手段があるが、それは決して等価で言い換え可能であるのではない。記述対象である事態がどの概念空間に位置付けられるかという点で明確に異なっているため、発話の談話機能も大きく異なっているのである。

#### 4. まとめ

小稿では英語の *have* 構文について考察し、それがどのような認知構造をもつものであるのかを明らかにした。第1節では先行研究として中右 (1998)、Langacker (1991, 1999, 2006) を概観し、その問題点を指摘した。そしてこのことを踏まえて、第2節では *have* の概念化に関与するドメイン・マトリックスの視点から *have* の多義性がより自然に説明できることを述べた。また、第3節では存在 *there* 構文と *have* 存在文について考察し、それぞれが異なる概念空間に事態を位置付けるという点で両者が区別されるべきものであることを論じた。

本稿では英語の *have* と日本語の「所有・存在の表現(「もっている」「いる(ある)」)」の対応関係を扱うことはできなかったが、直感的には日本語は話題化 (topicalization) が進んでいる言語であるということを考えると次のような対応関係を自然に説明できると考える。

- (31) a. John has three sons.  
 b. ジョンには3人の息子がいる。

そして、この分析に関しても認知ドメインからの考察は妥当性を有するものと考えているが、このことに関する詳細については改めて議論したい。



## References

- Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Douglas Biber et. at. 1999. *Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- 濱田英人・景山博幸. 2008. 「概念主体の認知プロセスと there 構文」札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』第 68 号.
- 早瀬尚子 2002. 『英語構文のカテゴリー形成』勁草書房.
- 葛西清蔵. 2007. 「知覚動詞構文と there 構文」札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』67 号. 23-35.
- 葛西清蔵. 2008. 「There 構文と俳句」札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』68 号.
- 久野すすむ・高見健一. 2002 『日英語の自動詞構文』研究社.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 1: *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2: *Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald. W. 1993. Reference-Point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4. 1-38.
- Langacker, Ronald. W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. (Cognitive Linguistics Research 14.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald. W. 2006. Subjectification, grammaticalization, and conceptual archetype. *Subjectification Various Paths to Subjectivity*. (Cognitive Linguistics Research 31.) Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』ひつじ書房.

- 中右 実. 1998. 「空間と存在の構図」『構文と事象構造』日英語比較選書 5. 研究社.
- 中島文雄. 1961. 『英文法の体系』研究社.
- 中村芳久. 2004. 『認知文法論 II』大修館書店.
- Quirk et. al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Taylor, John. 2002. *Cognitive Grammar*. New York: Oxford University Press.
- 上山泰男. 2003. 「機能的構文論における there 構文の分析」『函館英文学 XLII』函館英語英文学会.